

自然科学のとびら

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Vol. 30, No. 1 神奈川県立生命の星・地球博物館 Mar. 2024



ニホンカモシカ *Capricornis crispus*

KPM-NQM 418D

神奈川県足柄上郡松田町寄

2020年3月12日 鈴木 聡 撮影

すずき さとし
鈴木 聡 (学芸員)

ニホンカモシカは、本州・四国・九州に分布する^{くじらぐりていもく}鯨偶蹄目ウシ科の日本固有種です。かつては狩猟の対象となっており、肉や毛皮が利用されていました。しかし、乱獲により個体数が著しく減少したため、1925年に捕獲が禁止され、1955年には国の特別天然記念物に指定されました。保護の甲斐あって、中部地方などでは個体数が増加していますが、農林業被害が問題となっています。一方、四国や九州などでは個体数が回復しておらず、今も絶滅の危機に^{さら}晒されています。

神奈川県において、本種は準絶滅危惧種に選定されています。主な生息地は丹沢山地で、生息密度は0.4頭/km²と推定されています。丹沢山地の面積は約400 km²なので、この推定に基づくと、生息数はたった160頭です。本種は、2017年頃から箱根でも確認されています。周辺地域から分布を広げ、新たに定着したものと推測されます。

神奈川県内における本種の分布や生態については、不明な点が多く、保護のためにより詳細な調査が必要です。

一枚の写真から紐解く希少淡水魚の絶滅と保全

せのう ひろし
瀬能 宏(学芸員)

はじめに

博物館を本年3月末で退職するにあたり、身の回りの資料を整理していたら、殺風景な池の写真が箱の中から出てきました。琵琶湖を水源とする宇治川本流の南側に広がる広大な河川敷内(現在の宇治川公園)に点在する池の一つで、私が大学2年生だった1979年2月に撮影したものです(図1)。場所は京都市伏見区の桂川・宇治川・木津川が合流する三川合流の少し上流で、昭和初期に干拓された巨椋池おぐらいけの北側に位置しています。当時、宇治川大橋からこの河川敷を眺めると、ヨシ帯の中に河道に沿った方向に伸びる細長い池や、それらを繋ぐ水路をいくつも見ることができました(図2)。

写真の池は宇治川大橋のすぐ下流側の左岸堤防沿いにあり、空気が乾燥する2月に撮影していることもあって、今にも干上がりそうに見えます。しかしながら、池の水面は本流の水面にほぼ近い水準にあり、周年干上がることはないと考えられます。宇治川の水量は、ここから10 kmほど上流にある天ヶ瀬ダムによって調節されています。普段の降雨程度では河川敷が水を被ることはありませんが、梅雨の豪雨や台風時にはダムからの放水によって河川敷全体が広大な湖のようになることがあります。河川敷内にある池や水路は洪水時の名残なのです。

希少魚発見!

1978年、私は、環境庁(現環境省)による第2回 自然環境保全基礎調査の調査員としてこの地域一帯の魚類調査を行っていました。以前から気になっていたこの池で採集を試みたところ、なんとアユモドキ *Parabotia curta* が発見されたのです(図3)。アユモドキはドジョウ科アユモドキ亜科びきの魚で、体は平たく尾鰭が二又に分かれていて、一般的に知られているドジョウとは容姿が大きく異なります。日本固有種で、滋賀県を含む琵琶湖淀川水系と岡山県、広島県に分布していましたが、現在では京都府亀岡市と岡山県の一部に生き残るのみで、1970



図1. 宇治川河川敷内の池. 増水時には周囲の植生が産卵床や仔稚魚の生育場所として機能する. 1979年2月, 瀬能 宏撮影(KPM-NIA 1336L).



図2. 宇治川河川敷の空中写真. 東西に広がる茶色い部分が氾濫原で、アユモドキが生息していた池は南西部に位置する. 1975年1月7日, 国土地理院撮影(CKK7414-C19-73).

年代当時でも宇治川を含む琵琶湖淀川水系ではすでに絶滅寸前と考えられていました。この時の調査では、相当数の成魚に加えて、幼魚も採集されており、この池で繁殖していることが確認できたことはたいへん驚きでした。

さらに驚くべきことは、同時に採集された魚に同じドジョウ科のヨドコガタスジシマドジョウ *Cobitis minamorii yodoensis* (コガタスジシマドジョウ *Cobitis minamorii* の淀川産亜種)が混ざっていたこと(図4)。当時はスジシマドジョウ *Cobitis taenia striata* の小型種族と認識されて

いた魚で、淀川(宇治川の下流)では“わんど”と呼ばれる河川敷の池や入り江で普通に見られました。しかしながら、淀川では1987年、宇治川では1996年に最後に記録が途絶えたとされており、すでに絶滅してしまった可能性がある魚です。

あつけない絶滅

これら2種の繁殖には、氾濫原はんらんげんやそれに準じた環境が必要不可欠であることが指摘されています。氾濫原とは、降雨による増水で水域面積が拡大する水深



図3. アユモドキの固定標本, FAKU 51908, 体長104 mm, 松沼瑞樹撮影 (KPM-NR 248080A).



図4. ヨドコガタスジシマドジョウの固定標本, FAKU 51901, 雌, 体長72 mm, 松沼瑞樹撮影 (KPM-NR 248076A).



図5. 河床低下した本流と乾燥化が進んだ河川敷, Google ストリートビュー (2023年2月撮影).

の方向にアユモドキの池がありました。注目していただきたいのは河川敷と川面との境界の地形、そしてその付近の植生です。川岸から切り立った崖になっており、河川敷の縁に沿って樹木が茂っています。45年間で河床が低下し、河川敷は乾燥して遷移が進み、陸地化・樹林化してしまった様子がおわかりいただけるでしょう。下流の大阪府^{ひらかたしくずは}枚方市楠葉付近の淀川では当時と比較して河床が約4m低下したとされているので、距離的に近いこの場所も同程度の低下が生じているものと思われる。淀川で行われている川底の砂利採取が原因とされていますが、筆者はダムによる土砂流出の減少と流路の固定化も大きく影響しているとみています。つまり、河川敷の池を残せたとしても、それだけでは^{そうばん}早晩干上がって魚は住めなくなったと考えられるのです。

写真は語る

今回、一枚の写真がきっかけとなり、日本固有の希少淡水魚が地域絶滅に至る過程を垣間見ることができたと同時に、当時の生息環境を撮影した写真を標本とセットで残しておくことの重要性を思い知らされました。標本はその種の存在証明となるだけでなく、様々な生物学的情報を直接取り出すことができます。そしてその個体が生息していた環境写真は、生息環境の復元の際に様々なヒントを与えてくれます。アユモドキを例にすれば、写真のような規模と形状の池でも、水位の増減があれば繁殖できることを教えてくれるというわけです。

日本の生物多様性は、1960年代の高度経済成長期に大きく損なわれたことが指摘されています。1970年代には、まだ開発や悪化を免れた環境がそこかしこに残されていました。調査時に標本を確保し、いつでも参照できるように保管しておくことは当然です。しかしその一方で標本が得られた生息場所の写真については、例え撮影されていたとしても大量の資料の中に埋もれがちではないでしょうか？ そのような資料を広く収集し、今のうちにデータベース化していくことが博物館には求められています。

の浅い湿地環境です。日本ではフナやコイ、ナマズなど、春先から水温が上がり、たくさんの雨が降る梅雨時に産卵する魚が多く見られます。これらの魚たちは、河川の増水とともに細い水路や周辺の水田などに侵入して産卵しますが、このような繁殖生態は氾濫原に適応したものです。彼らは捕食者が少ない^{はんも}抽水植物が繁茂する浅瀬で産卵し、^{ふか}孵化した子どもは育ちながら餌の豊富なより広い場所へ戻る生活を繰り返すことで種族を維持してきたのです。宇治川の河川敷では、周年涸れない池とその周辺環境が氾濫原として機能していたと言えるでしょう。

アユモドキの生息が確認された池は、1979年5月まで存続を確認していますが、その後間もなくブルドーザーで埋め

立てられてしまいました。この場所は筆者の自宅からわずか3 kmほどの距離にあったので、オートバイで時々様子を見に行っていましたが、ある日突然無くなってしまった池を前に呆然と立ち尽くしたことを鮮明に覚えています。当時の社会情勢では保全の手立てを取ることは困難であったと思われるかもしれませんが、もし埋め立てを阻止できたとして、アユモドキは存続できたのでしょうか？ 否、もっと深刻かつ、全国的な問題が進行していたのです。それは河床低下による河川敷の陸地化・樹林化です。

今、河川敷では

図5は2023年2月現在の河川敷を右岸から写した写真です。画面のほぼ正面

きだい 稀代の動物画家 藪内正幸—誕生と活躍の歴史

やぶうち りゅうた
藪内 竜太(藪内正幸美術館 館長)

藪内正幸とは

「藪内正幸」と聞いてピンとくる方は多くないでしょうが、絵本や児童書をはじめ、学術書から一般向け図鑑、広辞苑や世界大百科事典などの辞書類、さらには教科書や広告と携わった仕事は非常に多方面に及んでいるので、それらをご覧くださいと「ああ、この本なら知っている!」と思われるかもしれません。

生涯にわたって動物だけを描き続けた藪内ですが、実は画を学んだことはありません。完全な独学です。何より、描かれた動物や鳥たちには元となったポーズの資料はありません。藪内は写真等を見ることもなく、どんなシーンも描くことができました。そういったお話をしますとほとんどの方から「画も習ったことがない!? 何も見ない!? じゃあどうやって?」と聞かれます。そんな稀代の画家が生まれた背景を見てみましょう。

動物を描き続けた幼少時代

1940年に大阪で生まれた藪内は動物好きだった祖父の影響からか、幼少期より生き物に興味を持つようになりました。町中のいたる所にあつた空き地で身近な虫を捕まえたり、やってくる鳥を見たり、時には野良犬を連れて帰ることもしばしば。また近所の天王寺動物園には祖父によく連れて行ってもらい、そこで初めて見る「本物」の動物たちに感動し、興奮していたようです。当時は今のようにTVで動物番組が見られるわけではなく、動物や野鳥のキレイな写真集があるわけでもありません。もちろんPCやスマートフォンでいつでもどこでも画像検索や動画が見られるのははるか後のこと。いくら好きな事でも情報に限りのある時代ですから、初めて「本物」を見た時の感動は今の子ども達のそれとは比べ物にならなかったと思います。カメラは到底手にできないですから、記録するには自ら描くしかありません。そこで帰宅後に紙を広げて先ほどの感動を残そうと試みるものの、何も見ずに描くのは至難の業。当たり前ながらうまく描けないわけです。好きなことなのに、あれだけ感動して

興奮したはずなのにうまく表せないのはやはり悔しい。なぜうまく描けないのか、子どもなりに考えた結果が「ちゃんと動物の姿を覚えていない」からだ。例えばある時に大好きなライオンを見て上機嫌で帰宅するものの、紙に描かれたライオンは全く感動的ではない…そういった時、次に動物園へ行った際には開園と同時にライオン舎の前に行き、ライオンをじっと観察する。それこそ寝ていることがあっても、その日は「ライオンの日」と決めてきているので寝ているライオンをただただ見続け、そのまま閉園時間を迎える…。その集中力というか執着心は周りの大人を驚かせたようですが、さらに驚いたのは帰宅後に描いた画。そこには誰が見ても見紛うことのないライオンが描かれていました。時間をかけ、本物をじっくりと観察をすることによって、先ほどのライオンが脳裏に焼き付けられたのです。その領域にまで達すると頭の中はライオンで満ち溢れ、結果本人までライオンになりきって家の中を四つ足で歩き回っていたそうです。

今泉先生との出会いと交流

当然ながら動物に対する知識欲も半端なものではありませんでした。今と違って情報が溢れているわけではないので、動物にまつわることが記されたものを貪欲に集め、新聞からは写真が無い文字だけの記事でさえ丁寧に切り取りスクラップブックを作っていました。そんな情報に飢えていた小学4年生の時、一冊の動物の本を買ってもらいます。初めて手にする自分専用の動物の本、毎日飽きることなく頁の端から端まで何度も読み返しました。藪内が2000年に60歳で死去した際、仕事部屋の机から手の届くところにその本があったことから、いかに大切な宝物だったかがわかります。そして執筆者である今泉吉典先生に動物の疑問や質問を書き連ねた手紙を送るのですが、その方から丁寧なお返事をいただいたことが、後の人生を左右することとなります。

今泉先生からは他の哺乳類学者まで

ご紹介いただき、手紙のやりとりは高校生になってからも続きました。驚くべきは、お相手して下さった学者の方々。いただいた手紙は今も残っているのですが、その一通一通に目を通すと、それぞれお忙しい身でありながら、子どもからの手紙にその都度真摯に対応して下さいます。決して子ども扱いをせず、一生懸命な相手には本気で向き合う、そんな大人との出会いは少年にとってかけがえのないものだったはずで

す。高校3年生となり進学か就職か進路に悩んでいた時、今泉先生から「今度、世界一詳しい哺乳類の図鑑を作る予定だが、その挿絵を描いてみないか?」とお話をいただきます。この頃には、理科の教師よりも動物に関する深い知識を持つようになり、手紙を送る際には必ず画を描き添えていました。その上達ぶりは学者の方々も驚嘆するほどだったようです。世の中にこんな図鑑があればいいなど思うものを親よりも尊敬する学者の方が作る、その挿絵を自分が描くという、夢にも思いつかないようなお話をいただいたのが、卒業式まで1ヶ月を切った2月でした。そして高校卒業と同時に上京、図鑑を出版予定の福音館書店に入社することとなります。

福音館書店入社後

入社後は、手紙をやり取りしていた『世界一詳しい哺乳類図鑑』の執筆者である今泉先生が勤務する国立科学博物館に日参、そこで骨格標本のスケッチに明け暮れます。制作予定の図鑑はすべての哺乳類を網羅するような、全10巻以上のボリューム。そこに登場する哺乳類の多くは日本では飼育例も無く、研究途上で写真はおろか資料もほとんどないような種ばかり。つまり描くにあたっての参考資料が無いわけですが、今泉先生が言うには「骨格がわかっているれば写真が無くともどんなポーズでも描ける」。そこで様々な種の骨格標本を朝から晩まで描き続けました。食事の時間さえ惜しみ、物を食べながら海外の文献の模写を繰り返すという、寝ている以外は動物の

画を描き続ける生活が2年ほど続いたようです。今となってはその間に何万点のスケッチをしたのかわかりませんが、この期間が修行であり下積みの時間だったと言えます。当時を思い起こして蕨内が言った言葉は「あの2年間は楽しかった。朝から晩まで動物の画を描いていられたんだから」。

『世界一の哺乳類図鑑』出発と挫折

入社から2年以上が経ってようやく図鑑の挿絵に着手したものの、見たこともない、写真も無い動物たちを描かねばならない。当然何度となく書き直しをさせられていたようです。1巻当たり何百カットも挿絵の入る図鑑でありながら、その1カット1カットが描いてはダメ、描いてはダメの繰り返し。それでも1年以上をかけてようやく最初の一冊分がまとまり、改めて今泉先生に見せに行くと「よく頑張った」と言って下さり、全てのカットを最後まで見終わると、再び「よく頑張ったね」。そして「じゃあもう一回最初から描き直そうか」。20代前半の若者が毎日朝から晩まで画を描き続ければどんどん上達してしまうようで、「最初の方と最後ではタッチが変わっている」とのことでした。

そんなことを繰り返しながらも5年近くかけてようやく3巻分の画が仕上がる頃には画力も安定し、書き直しをすることもほとんどなくなりました。本人の言葉によれば「この頃が人生で一番幸せだった」そうですが、何とそのタイミングで諸般の事情により出版が見送られることになってしまいます。経営上のやむなき判断だったようですが、その図鑑のために上京し、そのために骨格を描くだけで2年を費やし軌道に乗ってきてこれから、という時に！本人の落胆ぶりは相当なもので、一時は退社して大阪へ戻ることも考えたようです。しかし新たに、福音館書店が得意とする子ども向け絵本を手掛けることとなります。福音館書店は「子どもには本物を見せなければならない。子供騙し^{こどもごまかし}ということはありません。騙せるのは先入観を持った大人だけだ。初めて外の世界を知る絵本に描かれているものが不正確であって良いはずがない」といったスタンスで絵本を制作していました。

絵本作家としてデビュー

児童書の出版社として今は名の通る福音館書店がなぜ世界一詳しい哺乳類図鑑の制作を計画したのか。それは子ども向けの本とはいえ誤りはもちろん、大人の都合の良い解釈、偏見で動物を扱っていないか、それを編集者がチェックするのに適した図鑑が当時は無かったのです。質の良い絵本を作るために世界一の図鑑を作る、そのために無名の高校生に白羽の矢を立て数年かけて育て上げるという、現在の時間尺度からすればちょっと信じられないような話です。学者に徹底的に鍛え上げられて、世界にも充分に通用するまでになった動物専門の画描きは、福音館書店が子どもたちに与えたい絵本を製作するのに最適な人材でした。こうして動物の専門知識を持ち、かつ内部構造から熟知した絵本作家が誕生したのです。

1965年に絵本デビュー作となる『くちばし』(図1)以来、翌年には130刷を超えるベストセラーの『どうぶつのおやこ』、1969年にシリーズ刊行物『かがくのとも』の創刊号である『しっぽのはたらき』、1977年には今もブック・スタートに選ばれることの多い『どうぶつのおかあさん』などが出版され、動物画家のほか絵本作家の肩書も持つようになりました。同時に『冒険者たち ガンバと十五ひきの仲間』などの物語や教科書、図鑑、辞典などにも挿絵を描き、1973年の愛鳥キャンペーン新聞広告(サントリー株式会社と団法人日本鳥類保護連盟：いずれも当時の名称)では新聞一面に展開される野鳥の迫力あるペン画(図2)を発表しました。このように死去する直前まで、ただひたすらに動物や野鳥を描き続けた人生でした。

好きこそものの上手なれ

当館でも蕨内の子ども時代の画を展示することがあり、それを見た方々は「やはり天才の人は子どもの頃から違いのね」と必ずおっしゃいます。しかし私からすれば、蕨内は決して画描きとして天才ではないと思っています。天才ではないけれど子どもの頃からあり得ない数の画を描いてきました。先の科学博物館でのエピソードでもわかるように、寝ても



図1. 絵本デビュー作である『くちばし』(ピアンキ文/田中友子訳/蕨内正幸絵; 福音館書店 1965年)表紙。



図2. サントリー愛鳥キャンペーンの新聞広告。

覚めても画を描き続けていました。図鑑など高価でまだまだ買えなかった中学高校の頃には、手元に置いておきたい一心で何冊もの図鑑の全頁を模写しました。30歳で福音館書店を退社してからはフリーのイラストレーターとなりますが、仕事に疲れて休憩をする際にはその辺の紙に好きな鷹や鷹を描いていました。筆休めに、筆を取っていたのです。

それだけの数を描いたら誰でも上手になるでしょう。一つのことに時間を使えば下手なわけがありません。しかし、普通はそれだけの数をこなすことができないと思います。延々と飽きずに続けられないと思います。でも、蕨内は描き続けました。どれだけ描いても苦ではなかったようです、好きなことだから。だからあえて天才という言葉を使うなら画描きとして天才ではなく、天才的に動物が好きだったんでしょう。その好きな動物を少しでもカッコ良く描きたいから何度も描き続けた…稀代の動物画家が生まれた背景には、「好きこそものの上手なれ」を地でゆく少年の姿がありました。

鳥をいちばんかっこいい姿に描ける画家、藪内さん

あきやま こうや
秋山 幸也(相模原市立博物館 学芸員)

鳥を好きになったのは絵がはじまりだった

小学校低学年のころ、家にあった図鑑を引っ張り出して落書帳に模写するのが私の遊びの一つでした。その絵の出来は、残念ながら客観的に見て「才能」を見いだすことはできず、まったくもって平凡なものでした。しかし、落ち着きが無く、1日中うろさく飛び回って遊んでいるような子が、落書き中だけは集中して静かだったからなのでしょう、家族はその絵を盛んに褒めてくれたのです。

そんなわけで大学ノートの落書帳に「鳥シリーズ」が2冊、3冊と続いていたある日、ふと庭を見ると、小鳥が植込みから次々にアオムシをつまんで食べています。

「あ、シジュウカラだ」

落書きに書き添えた種名が深層にあったのでしょうか、誰に教わるでもなく、自然と種名が浮かんだことに驚くと同時に、図鑑の世界が自分の身近なところに実在するという発見に、心躍ったのです。これが、私が野鳥観察を始めたきっかけです。

藪内さんとの出会い

そんな小学生にとって、日曜日の朝刊に月1回掲載される、とても待ち遠しい紙面がありました。愛鳥キャンペーン新聞広告(サントリー株式会社と財団法人日本鳥類保護連盟：いずれも当時の名称)です(図1)。この広告は、半面ほどのスペースを使って、ダイナミックな野鳥などの線画に、自然保護を啓発する1,200文字ほどの文章が添えられたものです。図鑑では見たことのない、鳥たちの躍動感あふれる飛翔図や正面顔など、



図1. 愛鳥キャンペーン新聞広告(縮刷版)。

精緻せいせいで美しい線画に、自然保護を啓発する格調高い文章。小学4年生で日本野鳥の会へ入会し、いっばしのバードウォッチャー気取りだった小学生を魅了していたのです。1973年から1981年まで77回に及ぶ広告の作画をすべて担っていたのが、藪内正幸さんでした。

さらに、鳥の絵を飽きずに描いていた息子にと親が買い与えてくれたのか、『別冊アトリエNo.121 鳥の描き方』(内田康夫・藪内正幸, 1976)も手もとにあり、新聞広告と併せて藪内さんの名は私の中で燦然さんぜんと輝く「大師匠」となったのです。

たった1度の面会

そんな変わり者の小学生(当時は小学生男子がサッカーや野球もせず野鳥観察に夢中なんて、相当珍しかった)も、大学生になります。詳細は省きますが、バードウィークに、あるテレビ番組のアルバイトの話があつて引き受けました。戸隠とがくし(長野県)からの生中継番組で、いくつかの企画の中の一つとして、私を含めたアルバイトの大学生がバードウォッチングをして、出現種を報告するというものがありました。別企画のゲストの一人が藪内さんだったのです。

前夜に戸隠入りし、戸隠神社中社の旅館でゲストのみなさんにご挨拶かたがた、少し歓談のお時間をいただけたこと。たしか10名近くの学生アルバイトの中で、私以外の全員がもう一人のゲストであった写真家の宮崎学さんを取り囲んでいました。1人だけ緊張おもちの面持ちで藪内さんの前に座った私に「君はそっち(宮崎さん)の方じゃなくていいの? 気を遣わなくていいんだよ」などと、優しく声をかけてくれました。藪内さんにお目にかかりたくて来たということをやっとの思いで伝えると、それじゃあと言って、様々なこととお話していただきました。

自分が一番見たい姿勢と向きで描く

後からそれがシャイな藪内さんの照れ隠しだったと知のですが、話の半分かそれ以上は冗談だじゅれや駄洒落で、リアク

ションに困ったことを覚えています。そんな中で印象的だった言葉は、「写真をトレースしちゃダメ、写真はレンズの歪みがあるからね。」「双眼鏡を覗きながらスケッチなんてしないねえ。とにかく写真を撮ったりしながら、じっくり観察するんだ。アトリエに戻ってから頭の中で姿勢や形を再構築して描いてるよ。」「どうせ描くなら自分が一番見たい姿勢と向きで描きたいでしょ。」

こちらへ向かって飛び込んでくるように飛ぶ猛禽もうきんるい類や、大海原を滑空する海鳥。実際に観察するのが困難なシーンでも自在に描いてしまうのは、そうした観察に加え、若いころに国立科学博物館でひたすら骨格標本と向き合った経験が生きている。そんなことが『別冊アトリエ』にも書かれていたことを思い出しながら聴いていました。

藪内さんのちょっと異色な作品の一つに、オオタカの飛翔図があります(図2; 藪内正幸美術館所蔵)。下絵から完成までの製作過程を4点の順に追ったこの作品も番組内で紹介されたのですが、この時手に取って見せていただきました。

緊張のあまりすべての会話を思い出せないのですが、絵から湧き出る野生動物への愛情と藪内さんのお人柄が1本の線でつながっているのを実感できたことは、強く印象に残っています。ただ一つ悔やまれるのは、「君の絵も見せてくれればよかったのに」と言われたことです。あまりにも恥ずかしくて、自作の絵を持参しなかったのです。でも、それを見たときの藪内さんの表情を想像するだけで、今も顔から火が出そうになり、お見せしなくてよかったと自分に言い聞かせています。



図2. オオタカ飛翔図(完成図)。

絵は“観る楽しさ”を教えてくれる

ごとう うたか
神戸 宇孝(鳥類画家)

野鳥の動きと捉えるために

私は幼稚園の時にジョウビタキという鳥に出会ってから野鳥観察を続けています。当時は今のような望遠もできる安価なデジタルカメラがなく、子供にとっては高価な望遠レンズとフィルムで野鳥撮影は夢の夢でした。そんな中、小学生の時に動物画家の藪内正幸さんの野鳥のペン画集「野鳥の四季」(講談社)に出会いました。

野外で出会った野鳥が生き生きとした姿そのままに絵になっているのを見て模写をするようになり、描くおもしろさを知りました。

これまで私は藪内さんに2度お会いしました。最初は小学生の時にかけた講演会でした。講演会の後に幸運にも自分が描いた鳥の絵を見ていただける機会がありました。すると「いい絵を描くね〜！」と褒めてくださり、鳥全体の骨格を意識しながらたんだ翼と足の向き、爪などの描き方を丁寧に指導していただきました。

「例えば鳥の足が草の中に隠れている絵だとしても、描かれていない足を“知っているけれど描いていない”のと、“知らなくて描けていない”とでは、最終的な全体の雰囲気が見違えるほど変わるから、きちんと知識を深めなさい」とも教わり、それからは野外観察に加え、博物館へ行った時は野鳥の剥製の羽毛一枚一枚の模様や足の指の鱗の様子などをしっかり確認していました。



図1. 野鳥のペン画集「野鳥の四季」(講談社1982年)

2度目は上野動物園のサル山の前でした。浜離宮での朗らかな笑顔と対照的な真剣な眼差しでニホンザルの動きをじっと目で追いつける“画家としての藪内正幸”の姿に、畏れ多くて話しかけられませんでした。

この話を息子の竜太さん(藪内正幸美術館館長)にすると「きっとその時に声をかけても大丈夫だった

と思いますよ」と仰います。しかし、私にとっては画家として生きる大事な要素を見た時間だったと信じており、声をかけなかったことも、大切な思い出としています。

留学先にて

野鳥を描くことが楽しくなって専門的に学びたくなり、私は英国へ留学しました。英国は、大航海時代(16世紀頃)にはカメラがなかったため、探検や冒険に絵師(イラストレーター)を連れて行き、記録用に描かせた経緯があります。現在でも図鑑やインテリアに野鳥画の需要があり、多くの鳥類画家が活躍をし、教育機関に生物画の専門的学科も存在しています。

コースは3年で、1年目はとにかく様々な生物の骨格を描きました。藪内さんから教わったように、骨格を意識して描くことは最も重要なことと教わりました。

留学中の授業で、大変勉強になったことの一つは“描いている絵は何のために描いているか”という視点です。英語圏ではイラストレーションとアートは明確に区別されています。イラストレーションは正確には“解説のための絵”を指し、描いた内容を他人が理解できるように描くことが重要視されます。その一方で、アートは自分の表現したいものを描きます。単純に言うと、絵を「誰かのために描く」とイラストレーション、「自分のために描く」とアートになります。そのような視点で、帰国後に藪内さんの絵を藪内正幸美術館で拝見すると、絵によってイラストレーションとアートの違いを(意識されて描いておられたかどうかはお聞き

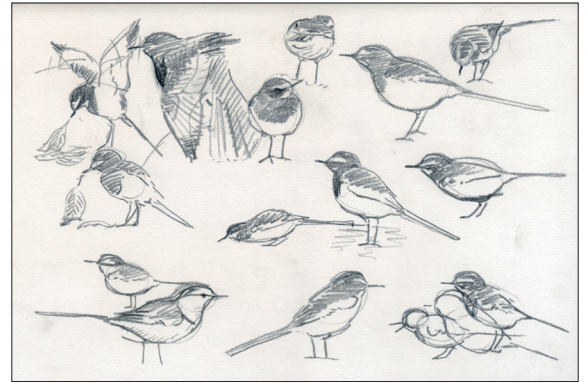


図2. 私のスケッチ画。

していませんが)、きちんと分けておられると感ずます。今回の展示でも、その違いをみなさんに感じていただけたら、藪内さんの絵のファンの一として嬉しく思います。

絵が教えてくれる“観察のおもしろさ”

「鳥はどうやったら描けますか?」と私は聞かれると、まず“よく観察すること”と答えます。よく似た鳥もそれぞれに微妙に違って、その違いが“その鳥らしさ”を特徴づけることもしばしばです。模様に加えて、目の大きさや尾羽の長さ、嘴の形など、その「らしさ」に気付くのは、写真を眺めている時よりも、不思議と観察をしているときが多いのです。例えば、ハクセキレイとセグロセキレイの見分けは図鑑では色での見分け方が紹介されていますが、胴体の厚みに少し違いを感じる事が多く、特に脚の付け根から尾羽にかけてセグロセキレイの方がポテッとしていることが多いと感じます。実際にそのように描くと納得のいく絵になります。絵を描くことによって、あるいはじっくりと観察することによって、図鑑では紹介されていない特徴に気づくことができるのです。

また、体の動かし方にも特徴が表れるので、観察を通してその動きを目に焼き付けることも重要です。絵では“鳥の動き”も表現できるので、野外で役立つ識別ポイントを、絵ならば伝えやすいと私は信じています。「野鳥を知るには写真も良いけれど、絵も良いですね」。そんなことを、一人の鳥類画家として伝えていきたいと思っています。

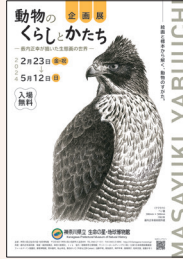
催し物のご案内

企画展「動物のくらしとかたち — 藪内正幸が描いた生態画の世界 —」

2024年2月23日(金・祝)～5月12日(日) 9:00～16:30(入館は16:00まで)

休館日:2月26日(月)・3月4日(月)・11日(月)・12日(火)・13日(水)・
14日(木)・18日(月)・21日(木)・25日(月)・4月1日(月)・
8日(月)・9日(火)・15日(月)・22日(月)・5月7日(火)

動物のしぐさや彼らがくらししている環境を描いた「動物生態画」は、図鑑や絵本などに広く使われてきました。今回の展示では動物画家として著名な藪内正幸氏の絵画を動物の標本や写真とともに展示し、生態画の意義や動物のくらしぶり、かたちの多様さを紹介します。



≪ 事前申し込みの講座 ≫

詳細は、博物館ウェブサイトや催物案内をご覧ください。

●植物図鑑の使い方～春の花編～[博物館、他]
日時/4月13日(土) 10:00～12:30 ※雨天中止
対象/小学4年生～成人・教員 25人
※小学生は保護者参加必須、
その場合は幼児連れ可。
申込締切:4月2日(火)

●春の里山の植物[横浜市]
日時/4月20日(土) 10:00～15:00 ※雨天中止
対象/小学生～成人 25人
※小学生は保護者参加必須
申込締切:4月9日(火)

●おやこで貝がらをしよう(1)[博物館]

日時/5月5日(日) 10:00～12:00
※(1)と(2)は同じ内容です。

両方へ申し込むことも可能ですが、当選はどちらかになります。

対象/小学生とその保護者 各回6組18人
※保護者参加必須

申込締切:4月23日(火)

●おやこで貝がらをしよう(2)[博物館]

日時/5月5日(日) 13:30～15:30
※(1)と(2)は同じ内容です。

両方へ申し込むことも可能ですが、当選はどちらかになります。

対象/小学生とその保護者 各回6組18人
※保護者参加必須

申込締切:4月23日(火)

●磯の生きものウォッチング(1)[真鶴町]

日時/5月11日(土) 10:00～14:00 ※荒天中止
対象/小学生とその保護者 30人

※保護者参加必須

申込締切:4月30日(火)

●地形地質と鳥瞰図の観察会[湯河原町]

日時/5月12日(日) 10:00～15:00 ※雨天中止
対象/中学生～成人 20人

申込締切:4月30日(火)

●オタマジャクシを顕微鏡で観察してみよう
[博物館]

日時/5月18日(土) 10:00～12:00

対象/小学生～中学生 10人

※小学1年～3年生は保護者参加必須

申込締切:5月7日(火)

●博物館学入門

～展示論・経営論とおすすめの博物館紹介～
[博物館]

日時/5月18日(土) 13:00～16:20

対象/成人 30人

申込締切:5月7日(火)

●磯の生きものウォッチング(2)[真鶴町]

日時/5月26日(日) 10:00～14:00 ※荒天中止
対象/小学生とその保護者 30人

※保護者参加必須

申込締切:5月14日(火)

催し物の詳細や最新の情報は、当館ウェブサイト、
および公式X(旧Twitter)でご確認ください。

生命の星



[公式ウェブサイト] <https://nh.kanagawa-museum.jp/>

[公式 X] @seimeinohoshiPR [混雑情報 X] @seimeinohoshiCI

[問い合わせ先] 企画情報部 企画普及課 TEL: 0465-21-1515

ライブラリー通信 牧野富太郎が残した本

もちつき せんな
望月 千奈(司書)

「日本の植物分類学の父」として知られる牧野富太郎氏は、生涯を通して植物分類学の研究に打ち込み、新種や新品種の植物を約1,500種類以上命名しました。昨年に放送された連続テレビ小説『らんまん』の主人公のモデルとなり、牧野氏を知った方も多いと思います。一生涯のうちに収集した標本は約40万枚にもなり、蔵書の数は約4万5千冊であったと言われており、牧野氏自身も数多くの著書を残しています。

『日本植物志図篇』(自費出版)

明治20(1887)年に25歳であった牧野氏は友人らと『植物学雑誌』を創刊し、翌年の明治21年から『日本植物志図篇』の刊行を自費で始めます。自ら描いた植物図を載せた牧野氏の処女著である本書は、植物学教室の教授から絶賛されました。

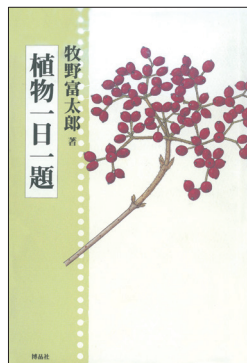
『牧野日本植物図鑑』(北隆館)

昭和15(1940)年、牧野氏が78歳の時に北隆館より刊行されました。「いろいろの書物を著わし、出版した中で一番広く世人に愛読せられている」と自任する牧野氏の研究の集大成となる図鑑です。初版刊行後も牧野氏が晩年にわたり訂正・追加を行い、版を重ね続けました。

『随筆 植物一日一題』(東洋書館)

晩年に牧野氏が100日の間、毎日1題ずつ欠かさず綴った随筆集です。昭和28(1953)年に東洋書館より出版されました。分類学上の知見や学識が軽妙な語り口で紹介されており、牧野氏の人柄が感じられます。

他にも著書や関連書籍が多数出版されていますが、悲しいことに連続テレビ小説の放送が終了してしまうと、世の関心は一気に薄れてしまいます。当館のライブラリーでは牧野氏に関連した書籍を公開し続けていますので、ぜひご覧ください。



『植物 一日一題』
牧野 富太郎/著
博品社 1998年
※『随筆 植物一日一題』
東洋書館の再刊

自然科学のとびら

第30巻1号(通巻114号)

2024年3月15日発行

発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館
館長 田中 徳久

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

TEL: 0465-21-1515 FAX: 0465-23-8846

編集 本杉 弥生(企画普及課)

印刷 株式会社あしがら印刷

© 2024 by the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.